



農村生活のすすめ

第14回：「域学連携」についてのすこし長いコラム

主席研究員 川井 真

1. 学生との対話

ここ数年、明治大学和泉キャンパスで春学期と秋学期を通して「高齢社会のまちづくり」をテーマとする自由講座を開講している。法学部の学生が中心ではあるが、文系の全学総合講座として他学部の学生にも間口を広げているため、経営学部や情報コミュニケーション学部などの学生たちも受講している。まちづくりが主題となる授業ではあるのだが内容はいたって哲学的かつ学際的なもので、具体的には、日本の21世紀は生活の内実を豊かにする“まちづくり”の世紀である、という仮説に基づいて——文明論的な視座から——日本の動向を分析し、思考実験を繰り返すことで、未来を創造していく力を身につけさせることが目的である。したがって歴史に埋もれた斬新奇抜な思想を掘り起し、各地（各国）で展開される先進事例なども紹介しながら、飼いならされてしまった思考の外へと彼らを連れ出し、彼らに文化を再創造していく力を身につけてもらいたい、という願いを込めて授業を展開している。

2017年度を受講生は春学期が147名、秋学期は151名であり、このテーマに関する現代学生たちの関心の高さがうかがえる。シラバスの授業概要には、さらなるグローバル化の進展が予想される21世紀であるが…という前置きをしたうえで、「日本は国際社会において高齢社会先進国としての責務も負っている」や、「これから半世紀を超えて、総人口が毎年100万人規模で減少を続ける本格的な人口減少時

代へと突入していく」、あるいは「GDP成長率に代わる新たな豊かさの指標を、ユーラシア大陸の東の端から全世界に向けて発信すべきときが、すでに到来している」といった内容を掲載しているので、この講座の趣旨を理解したうえで履修届は出してくれているはずである。

この授業を通して学生たちに問いかけているのは、21世紀という時代が、本当に成長と拡大だけを追い求める時代であっていいのか、という素朴な疑問であり、その問いに託したのは、外へ外へと拡大する意識を、あらためて内なるものへと再帰させ、等身大の生活世界でともに生きる人たちの存在を感じ取ってほしい、という期待である。

したがって学生たちには、社会科学に属する学問のみならず、人文科学や自然科学、あるいは死生学や認知科学など新しい学問領域から発信される情報にも耳を傾けてもらい、それらを統合できる思考の柔軟性に期待しながら、常識にとらわれず、つねに思考を飛躍させることを求め続けている。

授業の構成は表のとおりで、その内容は多岐にわたっている。とはいえ、いつも話がわき道にそれるので、この授業計画通りに進んだ例はない。今年度、授業理解を深めるために学生たちに示した参考文献は約280冊で、関心のある書籍から手に取ってもらい——自主的にではあるが——感想と意見を報告してもらうことにしている。

この1年間の授業を通して、モノの見方、

表 年間カリキュラム

[春学期]	[秋学期]
第1回：イントロダクション（創造的想像力とは）	第1回：イントロダクション（まちづくりの思想）
第2回：導入（創発へのアプローチ）	第2回：導入（これまでの議論のまとめ）
第3回：社会的リスク	第3回：文明と人口
第4回：近代科学と人間の学	第4回：環境経済と定常経済～自然共生という選択
第5回：近代医療史の概要～福祉国家の変遷	第5回：CSV（Creating Shared Value）の可能性
第6回：経済政策と社会保障	第6回：地域包括ケアの概念
第7回：欲望と消費～エコノミーとエコロジー	第7回：老年学と死生学
第8回：地域主義と内発的発展論	第8回：まちづくり実践事例Ⅰ
第9回：アイデンティティと共通善	第9回：まちづくり実践事例Ⅱ
第10回：論理的思考	第10回：高齢社会のアクション・リサーチ
第11回：プラグマティズム	第11回：高齢社会のアクション・リサーチ
第12回：社会システム理論	第12回：高齢社会のアクション・リサーチ
第13回：貨幣論	第13回：高齢社会のアクション・リサーチ
第14回：まちづくりの思想	第14回：全体のまとめ

考え方、感じ方を深化させるための感性や想像力を養い、独断や偏見を打ちくたくための基礎理論を身につけさせることが狙いである。すなわち人文・社会科学から自然科学に至るまで、異なる学問領域を越境し、「まち・ひと・しごと」という視座からそれらを統合することのできる柔軟な思考を養うことを目指したのである。願わくは彼らに、来るべき未来への希望を託したいのである。

2. 祝祭の論理と協働体験

2017年の夏、8月1日から7日までの1週間、富山県魚津市が主催する農商工連携インターンシップ事業が実施され、本自由講座からも12名の学生が参加してくれた。「魚津エクスターンシップ」として実施した当該事業は魚津市から当研究所が受託し、明治大学社会イノベーション・デザイン研究所ならびにウェルネス・ライフサイエンス研究所との異能種研究機関連携により——相補的な機能分担を図ることで——実現した企画である。このインターンシップのユニークなところは1

週間のプログラムの中に「伝統的な祭りへの参加」という時間が組み込まれていることだろう。具体的には、国指定重要無形民俗文化財でユネスコ無形文化遺産にも登録された「たてもん祭り」に曳き手ボランティアとして参加することや、市指定無形民俗文化財に登録される「せり込み蝶六踊り街流し」の特訓を受けて市役所のメンバーとして街流しに参加すること、などである。その他にも、株式会社伊藤園の協力により実現した「魚津の美味しい水を使ったお茶の入れ方セミナー」の受講や、今年から始まった魚津の新たな夏のイベント「UO! JAZZ」見学なども入った、日程的にはかなりハードなプログラムであった。とりわけ特徴的なのは、滞在期間中の学生たちの日常に地域の方々とコミュニケーションする時間を意図的に増やしていることだろう。すなわちそれは新しいコンセプトに基づく地域滞在型・異文化体験型のインターンシップなのである。したがって滞在期間1週間とはいえ、思考と対話を繰り返すプラグマティックな経験のなかで、明らかに魚津に生き

る人々と学生たちの関係性密度は高まっていった。振り返れば、それは魚津という土地にダイブする「地域そのものへのインターンシップ」であったといっている（詳細は本誌28～31頁 川尻稿参照）。

じつは、これを契機として学生たちのなかに新しいムーブメントが起こり始めている。そのひとつが、当研究所が「食・エネルギー・ケアを基盤とする農山漁村地域の内発的発展モデルに関する研究」を推進するため長崎県対馬市で展開する「対馬プロジェクト」への、学生たちの積極的かつ主体的な参加である。もちろん彼らは研究目的で同行しているわけではないが、ここに参加する学生たちは、すくなく本研究所の趣旨と目的あるいは世界観のようなものを共有してくれている…そう

断言してしまっても、たぶん誤りではないのだろうと感ずるのである。8月中旬以降、すでに何人もの明治大学の学生たちが長崎県対馬市を訪問し、島の生活基盤の再生に向けた取組みや産業の活性化、地域包括ケアの基盤づくり等を——あくまでも間接的にはあるが——意識的に推進してくれている。具体的には、住民会議への同席や健康創造まちづくり事業（あぐりパークプロジェクト）への主体的な参加、地域包括ケア会議の運営補佐や農林水産業の実態調査（実地体験）、地域住民との交流と親睦、歴史・民俗学的なフィールドワークへの同行などの共通体験を通じて、島の生活を理解しようと努めてくれているのである。このような学生たちの島への還流は、はからずも、島民の心に未来への希望

ヤマブドウの収穫



アグリパーク集合写真



キビの収穫



かまどづくり③



かまどづくり①



かまどづくり②



蕎麦の作付け



蕎麦の作付けメンバー



蕎麦の収穫①



蕎麦の収穫②



蕎麦の収穫メンバー



収穫したヤマブドウの成分分析を行うための準備



ピザ窯づくり



学生たちが作付けした蕎麦畑



地域包括ケア会議



いづはら診療所の桑原医師・現地で知り合った立教大学生とシーカヤック体験



学生宿舎「梅香荘」の梅さん・寮長の上妻くん（九州大学院生）と記念写真



地域包括ケア会議の記念写真



を醸成する、という副次的効果も生じさせている（詳細は本誌24～27頁 高木稿参照）。

たしかに対馬は日本史の源流となる場所であり、歴史・民俗学や文化人類学の研究者にとって関心の高い場所ではあるが、海洋国家である日本において、そこは地政学的にも重要な拠点である。したがって国境離島対馬に暮らす人々の生活環境を改善し、永続的（持続可能）な生活基盤を構築することは、平和主義に立脚する日本にとっても——来るべき未来を創造するために——大切な意味を持つ。学生たちはそのことを感覚的につかみ取っているのかもしれない。ここに域学連携の本質的な意味と、都市から地方への若年層人材還流の意義もしくは可能性があるように思えてならない。

3. 柳田フォークロアと『日本の祭』

このような一連の出来事を客観的な視座から鳥瞰していると、ふと一冊の書籍に綴られた意義深いメッセージが古い記憶の中からよみがえってきた。民俗学の創始者である柳田国男は1941（昭和16）年に東京帝国大学（現東京大学）の全学教養部において教養特殊講義なる講座を開講している。このときの講義録が『日本の祭』という著書のおおもとになっている。『日本の祭』の冒頭、第1回講義となる「学生生活と祭」で柳田が当時の帝大生に伝えようとしたこと、そこに託した思いのようなものを、いまはなぜか理解できるような気がする。柳田が教養特殊講義の冒頭で語った内容と、ここ数年、自分自身が明治大学の自由講座で語っている話が、多くの点で重なり合うからである。太平洋戦争（大東亜戦争）へと突き進むきわめて不安定な内外情勢のさなかで——日本のリーダーとなるである

う若者たちに——柳田は何を伝えたかったのか。そのことを考えると、対馬という国境離島で喜怒哀楽を共有し、一緒に汗を流してくれている学生たちのことが無性に愛おしくなってくる。

柳田が『日本の祭』の冒頭で語った学生たちへのメッセージのいくつかを抜き出してみよう。そこには変わりゆく日本への哀惜と若者たちへのささやかな期待——希望といってもいいのかもしれないが——の感情が混在しているようにも感じられる。周囲の期待に応じて狭き門を開いた若者たちに向かって柳田は、たとえば「諸君は小学校を出た十三、四年から、いよいよ世の中に打って出る二十四、五歳の時まで、（中略）全く通俗社会とは利害を絶縁した、同輩の中でばかり生きているのである」、「…古来日本に持ち伝えた物心両面の生活様式を、受け継ぎ覚え込むのも、実はこの十年あまりの青年時代だったのである」、「あらゆる労苦に満ちた十幾年の勉学を積み重ねて、なおこんな手近なところにこれほど大きな「無学」が、横たわっておろうとは気づかぬのも無理はない」と前置きしたうえで、「国民の歴史の中には、文字には録せられず、ただ多数人の気持ちや挙動の中に、しかもほとんど無意識に含まれているものがたくさんある…（中略）単にそういうものを囲いの外に置くのが今までの学問であったので、学校へ出て来て学問をしていけば、今まではどうしてもこういう知識から、遠ざからずにはいられなかったのである」と語っている。そう、彼らは日本という国に古くからあった生き方や考え方、すなわち社会原理のようなものを何も知らない。それは仕方のないことで、柳田の言葉を借りるならば「教えようにも学ぼうにも、その機会というもの」が

暮らしの中から奪い取られてしまっていたからである。現代に至っては、さらに深刻の度を増しているのかもしれない。

4. 学生という希望の光

次代を担っていくのは誰でもない、現代の若者たちである。しかしいま、その若者たちの多くが都市部に集中している。高度成長期以降にはじまった「人口集中による都市の過密化」と「人口流出による農山漁村の過疎化」という現象は日本の産業構造の変化ならびにライフスタイルの変容と足並みをそろえるように定着し、その現実に対し、いまでは異論をはさむ余地さえも失われつつある。

人口密集地であり、産業と情報そして娯楽施設の集積地でもある大都市圏で生まれ育った若者たちが、もし農山漁村地域での生活を選択するとしたら、その動機は何なのか、当研究所が推進する「食・エネルギー・ケアを基盤とする農山漁村地域の内発的発展モデルに関する研究」には、このような問いへの解答を探り出す、という目的も含まれている。したがって富山県魚津市で展開した地域滞在型・異文化体験型インターンシップは、研究的視座から眺めれば、その動機を探り出すために実施したアクション・リサーチでもあったといえるだろう。

E.T.ストリンガーは著書『アクション・リサーチ』のなかで「コミュニティを基盤にしたアクション・リサーチは、すべてのステークホルダー、すなわち研究する問題から影響を受けているすべての人々が、研究プロセスに従事する」と語ったが、その観点から見れば、この活動に参加した学生たちは単なる客体ではなく、アクション・リサーチを推進するアシスタントでありパートナーでもあった。

また東京大学高齢社会総合研究機構の秋山弘子氏が『高齢社会のアクション・リサーチ：新たなコミュニティ創りをめざして』で述べたような再帰性、すなわち「研究者という主体が対象者という客体に干渉し、それによって変化した客体に対応するよう主体を変化させる」ような再帰的变化がアクション・リサーチの過程で生じるとするならば、この研究は主客同一性を内包しながら展開されることになる。

前段で、長崎県対馬市で展開する「対馬プロジェクト」に参加する学生たちは「すくなく本研究の趣旨と目的あるいは世界観のようなものを共有してくれている」ように感じる、と述べたが、これも柳田の言葉を借りるならば「文字には録せられず、ただ多数人の気持ちや挙動の中に、しかもほとんど無意識に含まれているもの」を、学生たちは自らの感性で、野生を取り戻すことによって、このとき身体化していたのかもしれない。ときにはキャンパスを飛び出し、地方のまちにダイブして「古来日本に持ち伝えた物心両面の生活様式」を受け継ぐこと、学生たちのこのような活動の先に、日本の未来への希望が見えてくる。